注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
塵芥ヒーロー列伝？

【作者名】
黒津

【あらすじ】
その時々で思いついたのを書いていきます
自己満足です、数話書いたら終わります、丸投げジャーマンです
なんだったら勝手に使っても結構です
「くっくっく、俺が最初の刺客……ウボァー!!」とかでもご自由に

第一話・コネクト＝プリキュア

そこには誰もいなかった。
アスファルトの道路にコンクリートの建物。
そこに生きる人々がいれば普通の街並みだ。
だが、そこには誰もいなかった。
いや……2つだけ、生きているものがいた。
一方はファンシー、という言葉が似合いそうな小動物。
もう一方はヒーロー、という言葉が似合う格好の人物。
ただし、小動物に武器を向けている姿をヒーローと呼ぶのなら。

「くきゅぅー、くきゅぅー」

小動物は血塗れの姿で『ヒーロー』に呼びかける。
しかし、ヒーローはヒールのごとく……

「まだだ、まだ足りない……」

返り血を浴びたヒーローは一人の男に姿を変えて闇夜に消える。

＝＝＝

パンっ、と手を合わせた少女はカバンを手に取り、一階の食堂へ向かう。

「おはよう、母さん、パパ！」

食堂には優しそうな青年とエプロン姿の女性がいた。
青年のほうは食事を終えたのか既にコーヒーカップを傾けている。

「おはよう、ミライ」
「今日も元気だね、ミライは」

明日原未来（アスハラミライ）、今日も彼女の一日がはじまる。

＝＝＝

「大丈夫よ、サクヤさん。いつか、きっと……」
「キョウコ……うん、そうだね」

いつか、彼女の本当の父になるために。
いつか、本当の家族になることを信じて。
明日原今日子（アスハラキョウコ）、明日原咲冶（アスハラサクヤ）の一日もはじまる。

＝＝＝

明日原一作（アスハライッサク）、ミライの父親。
ＮＳＡＳ（ニホンスーツアクタースタジオ）の元エースだった男。
『ハイパー部隊』シリーズの主役枠、ファーストを担当していた。
しかし、彼の正義感は仕事で演じるだけでなく、実生活にもあった。

「よし、今日も頑張るぞー!!」
「そうね、頑張って居眠りだけはやめなさい」

明日原未来の正義は真面目な学生態度に繋がってなかった。

＝＝＝

だが正直に言って勘弁して欲しい。
興味のない事は極端にやる気のない彼女。
そんな彼女は興味のあることに全力を尽くすのだ。
それこそ、尽くしすぎて常にバッテリー不足だから授業中に眠るほどに……

「……っていないし」
「ツムグーっ、こっちこっちーっ!!」
「アンタ、どこ行って……なにこれ？」

ミライの足元にいたのはファンシー、という言葉が似合いそうな小動物だった。
ミライに向いて鳴いているのを見る限り、ぬいぐるみではなさそうだ。

「くきゅぅー、くきゅぅー」
「はっ、これはもしや!?」
「知ってるの、ミライ？」
「セイントファイターのセイントパートナー!!」

Q：セイントファイターとは？
A：アクションヒロインアニメ

「……んなわけないでしょ」
「でもでもでもー!!」

たしかに、こんなファンシーな小動物に心当たりはない。
だからって、そんなモンが現実にいるわけがない。

＝＝＝

「おい、ガキんちょ……」

結局、ミライが小動物の面倒を見ることになった。
そしてツムグと別れた時に、男は現れた。
黒い髪、黒い瞳、ダークブルーのジャケット。
とにかく暗いとしか言いようがない男だ。
ぶっちゃけ、不審人物と言っても正解っぽい男だ。

「え、あ……なん、ですか？」
「お前、さっき動物を拾っただろ？」

それを知っているなんてストーカー？
ミライの不安など知らずに男は話を進める。

「その動物、俺に渡してもらおうか？」
「な、この子を……どうするつもり？」
「詳しくは言えない。だが、どうしても渡してもらいたい」

ジリジリと詰め寄る暗い男。

「きゃーっ、痴漢よーっ、変態よーっ!!」
「……ったく、面倒な」

少女の叫び声で男は姿を消す。
叫んだのは別れたばかりのツムグだった。

「アンタ、こういう時には助けを呼びなさいよ！」
「ツムグ、どうして？」
「ペット大百科、古いのだけど持ってきたのよ」
「あ、ありがとう」

足元にいる動物を見る二人。
あの男はなぜ、この子を狙ったのだろう？
「ひょっとして凄い高級ペットとか？」
「うーん、どうなんだろ？」

＝＝＝

第二話・コネクト＝プリキュア、その２

目の前に広がっていたのは赤い森だった。
元々の色でも、紅葉でもない、赤く揺らめく……

ヒーローは森を前に足を止めていた。
ただし、守るべきものを守れなかった者をヒーローと呼ぶのなら。

この世界に投げ出された自分を救ってくれたのは小さな命だった。
生きる気力のなかった自分に目的を与えてくれたのは優しい世界だった。
故郷と同族を捨てても守りたいと願ったのは愛しき未来だった。

だが、それが燃えている。
だが、それが守れないでいる。
だが、それが、それが、それが……

＝＝＝

「父さん、今日も頑張ってくるね」

＝＝＝

ようやく目的のものを見つけたのはいいが、社会的に面倒な連中に守られているのだ。
昨日から青い制服のアンチクショウが増えている気がする。
男はカードと携帯電話を取り出して決心した。

「今日の夕方……使うか」

＝＝＝

＝＝＝C＝＝＝

ツムグの声でミライは動物の変化に気付く。
その小柄な体が光を放っているのだ。
最初は淡かったその光は、徐々に閃光と呼べる光になっていく。

「この光……本当に、セイントパートナー!?」

アニメの中だけだと思っていた英雄。
その力が現実にあるのだとしたら？
その力はいつだってヒロインのピンチに目覚めるもの。

「そうだ、私は……!!」

＝＝＝

「よ、妖精⁉」
「コルル、クルル、二人を頼む！」
「ぷぎゅあっ⁉」
「何なの、説明してよ‼」

ゴーストタウン、豹変した動物、急に現れた三匹の妖精。
そのうちの一匹はミライの顔にぶつかった。
少女には理解できない出来事のオンパレードだ。

「……ったく、お前たちの見つけた動物はファンシーマだ」
「ふぁんしー、ま？」
「ファンシーマは妖精の国、コネクティア王国の住人だ」
「あんなのが妖精なの⁉」

ツムグの言いたいことも分かる。だが事実なのだ。
妖精の国に比べ、人間の国は汚れている。
その汚れが王国で最も純真なファンシーマを凶暴化させたのだ。
そして、それを追って人間の国にやってきた者がいるのも事実である。

「説明は終わりだ、コルル、クルル」
「はやく逃げるコルー！」
「にげないとあぶないでくるー！」

妖精たちに手を引かれて離れていくミライとツムグ。
羽賀根森人（ハガネモリヒト）は懐から携帯電話とカードを取り出した。
その隣には妖精のネルルがいる。

「ごめん、救ってやれなくて……ガルディオ・バレルコネクト‼」

携帯電話のスリットにカードを走らせる。
するとネルルが携帯電話に吸い込まれ、携帯電話は装飾銃へと変化する。
銃から放たれる光はモリトの鎧へと形を変える。
誰もいない街並みで小動物を撃った、揺らめく炎の森で絶望した……
それでも戦うことしか出来ない、戦士へと姿を変えていく。
『Ｃａｒｄ　ｒｅｇｉｓｔｒａｔｉｏｎ・Ｆｏｒ　ｔｒａｎｓｆｏｒｍａｔｉｏｎ　ｌｉｍｉｔ　６０』
さぁ、準備は終わった。
戦いのはじまりだ。
高らかに宣言せよ、戦士の名は……
「守護の銃身、ディオ・バレル!!」

第三話・コネクト＝プリキュア、その３

この子達は自分達に笑いかけてくれた。
よそ者であるはずの自分達を慰めてくれた。
だからこそ願った、この小さな命に幸あれ、と。
しかし、その願いは叶わなかった。
彼らの願いをよそに、奴らはこの子達の力を利用することを考えていた。
だから、同じ人間でありながら彼らと奴らは戦った。

彼らは妖精の国に伝わる力を使い
奴らは妖精の中に眠る力を利用し

＝＝＝

しかし、今回ばかりは彼にも疑問がある。

（今さっき凶暴化したのにファンシーガ級じゃないか？）

凶暴化したファンシーマは時間が経てばファンシーガへ更に凶暴化する。

このファンシーマはどう見てもファンシーガ並みになっているのだ。

だが、ここで退くわけにもいかない。

ディオバレルは腰のカードケースからカードを取り出す。

ネルルと携帯電話が変化した銃、ネルバレラーで読み取るためだ。

「バレルコネクト・トゥーハンド！」

カードの力で分裂するネルバレラー。

今、ゴースト商店街は戦場となる。

＝＝＝

もうツムグも自分で何をやっているのか分からない状態だ。

「……で結局アンタたちはなんなのよ？」

ようやく落ち着きを取り戻したツムグは妖精たちに問いかける。

騒ぎの中心地にいたのにも関わらず、なにも知らないのだ。

「僕たちも全部を知っているわけじゃないコル」

「でもわかることははなしてもいいくるよ？」

＝＝＝

＝＝＝

「今度のファンシーマがすごく強いコル」
「ファンシーマのつよさはやどぬしのこころのつよさくるー」
「宿主って……私!?」

ファンシーマは純真な妖精の国の住人である。
しかし人間の国の汚れはファンシーマを凶暴化させる。
そして、その力の強弱は面倒を見た人間、宿主に左右される。

「バカ言わないで！ミライは汚れてなんかないわ！」
「ぐりゅりゅりゅ～！」
「ツムグ、落ち着いて！」
「悪い考えだけが汚れじゃないコル」
「悪い考えだけじゃない……そうだ、力が欲しかった」
「……ミライ？」

それは少し前だったか、大分前だったかは覚えていない。
しかし、父が死んだ後の冬だったのは分かる。
母が泣いていたのだ。
なにが切っ掛けだったかは分からない。
冬の景色がそうさせたのかもしれない。
ただ、位牌の前で母が泣いていたのだ。

それからだ、位牌を自分の荷物としたのは。
それからだ、自分の人助けが今まで以上に多くなったのは。

「あれが、私の心……っ!!」
「ミライ、待ちなさい!?」
「クルル、ツムグを頼むコル！」
「ぐりゅー……」

＝＝＝

＝＝＝C＝＝＝

しかし、それは『ガルディオ』の分野ではなかった。
伝説の戦士は3人いる。

浄化の乙女、守護の戦士、踏破の勇士

今、この状況を打ち破れるのは浄化の力しかない。
しかし、ディオバレルにその力はないのだ。

「行け、新しい3人を見つけるんだ！」
「イヤねる、イヤねる、イヤだねるー!!」

互いに大切だから意見の食い違う一人と一匹。
しかし、その敵は無情にも近付いていった。

「ぐぎゅあああああああああっ!!」
「……ったく、ここで終わりか」

「待ちなさあああああい!!」
「……は？」

第四話・コネクト＝プリキュア、その４

止めないと、止めないと、止めないと……
少女はそれだけを考えて走っていた。
爆発に揺れる商店街の中心地、そこで彼らは戦っている。

「やめるコル、行っても無駄だコル！」
「無駄でもやらなきゃいけないの！あれが私の心なら、父さんの願った誰かの幸せを奪うのなら！」
「その父さんのことは知らないコル。でも、その誰かにはミライも入ってるじゃないコルか？」

それは考えた。
でも、足を止めることは出来なかった。
そこで止まらずに進み続けるのが自分の悪い所だと知っている。
それでも、自分の心に決着をつけれると信じて。

「ミライ、その覚悟は本物でコルか？」

＝＝＝

「ミライの顔にぶつかった時に気がついたコル、ミライの力について」
「その力があれば私も戦えるの？」
「……その覚悟は本当に本物コル？」

こんな事態なのだ、正義感が先走った考えかもしれない。
コルルはそんな選択のつらさを知っている。
ディオバレル、モリヒトもそんな人間だからだ。
戦える人間が自分しかいなかったから、だから守護の戦士となった。
モリヒトは表向きに愚痴を言い、悪態をつきながらも妖精の国を守るために戦ってきた。
しかし、その言葉が強がりであることは妖精の誰もが知っていた。

「だから、その覚悟は本当に本物コル？」
「……本物だよ、絶対の、絶対に」

＝＝＝

そう、ディオバレルに変身するときと同じような。

「コルル、お前……よせ、やめろ！」
「やめないコル、ミライは本気だコル！」

ミライは強い瞳でファンシーマを見つめる。
あの子は自分の過剰な良い心で歪んでしまったのだ。
なら、その歪みを戻すのも自分の役目だ。

「ミライ、変身だコル！」
「うん、行くよ……プリキュア・ネクストコネクト!!」

スマートフォンの画面にカードを押し当てる。
すると読み込みは完了しコルルとスマホは装飾のついたコンパクトへと変化する。
コンパクトから溢れる光はミライを包み、リボンの多いドレスに変わる。

『Card preparation・For transformation limit 20』

さぁ、準備は終わった。
戦いのはじまりだ。
高らかに宣言せよ、乙女の名は……

「聖なる未来、キュア・ネクスト!!」

＝＝＝

ディオバレルは荒い息で彼女を見つめる。
もう、変身と無人世界を維持するので精一杯だ。
確かに浄化の乙女の力なら、あのファンシーマを倒せるかもしれない。
だが、やれるのか？
今、この瞬間に変身したばかりの子供が……

「ぐぎゅあああああああああっ!!」
「よーし、来なさ……って速っ!?」

あの巨体からは想像出来ないスピードで迫るファンシーマ。
キュアネクストは咄嗟に一枚のカードを取り出す。

「ネクストコネクト・ハイテンション！」

次の瞬間、ファンシーマ以上のスピードでキュアネクストが動き出す。
そして連続バク転でファンシーマの突撃を回避してしまった。

「わはははははは、ＮＳＡＳ式連続バク転!!」
「凄い……」
「わはははははは、ハぶしっ!!」
「凄い……バカだ」

バク転しすぎて壁にぶつかった。
ハイテンションは肉体を上向きに強化する代わりに、精神的にも上向きに強化してしまうカードなのだ。

「ぐぎゅあああああああああああっ!!」
「はっ、ほっ、なんのっ!?」

しかし失敗したのは一度だけだ。
その後は的確に攻撃を避け、隙を見ては一発ずつ攻撃をいれている。
しかし、その程度でファンシーマは倒れない。
そんな攻撃で倒せるのならディオバレルの攻撃で既に倒せているはずだ。

「くっ、全然倒せないよ！どうすればいいの⁉」
「フィニッシュのカードだ、それしかない‼」

ディオバレルの助言が飛ぶ。
しかし、フィニッシュのカードがどれか分からない。
もたついている間にファンシーマの攻撃が命中した。

「へぶっ⁉」
「あのガキ……考えるだけでいい、必殺技のカードが出てくるように願え‼」
「必殺……必殺技、必殺技、必殺技‼」

ケースの中に並んだカードから一枚だけが顔を見せる。
ふちが金色のカードは確かに特別そうに見える。

「後１０分しか変身できないコルよ⁉」
「うえっ⁉あわ、ど、どうすればいいの⁉」
「必殺技に決まりはない、感じたとおりにやれ！」

時間もない、敵から受けた攻撃も痛い、どうすればいいのかも分からない。
キュアネクストは先輩の助言を信じ、カードを読み込ませる。

「ネクストコネクト・フィニッシュ！」

読み込ませた瞬間、衣装のリボンが大きくなる。
もはやリボンではなく８枚の翼だ。
ハイテンションのカードとは違う気分の高揚。
キュアネクストはリボンの羽ばたきで大空を翔る。

「プリキュア・ネクストダイバー!!」

＝＝＝

「くきゅぅー？」
「さ、おうちに帰ろ？ネクストコネクト・リターン！」

＝＝＝

コネクトプリキュア設定1

人物、用語設定

＝＝＝

＝＝＝

名前の由来は鋼、守人

ネルル
モリヒトの妖精でガルディオの力を秘めている。
個別の性格に差があるルルール族の少女でやきもち焼きの背伸びしたがり。

＝＝＝

壊されやすい。
よって、ファンシーマを取り込む際は近付いて使用するのが基本。

輪列（ループ）
特定の空間を繋げた閉鎖空間の形成。
結界の下位能力だが結界の中で重ねがけすることが可能。

騎乗（ライド）
高速二輪車マシンバレラーの使用。

二刀流（トゥーハンド）
武器の二刀流、二丁拳銃化。
オーバードローにより消失。

強化弾（マグナム）
飛び道具の破壊力を強化する。
オーバードローにより消失。

殲滅機（ランチャー）
広範囲攻撃の発動装置。
オーバードローにより消失。

包囲網（フルレンジ）
複数の攻撃端末による同時攻撃。
オーバードローにより消失。

速攻撃（ラピッド）
攻撃速度の強化。
オーバードローにより消失。

爆裂化（エクスプロード）

攻撃に爆発を加える追加ダメージ。
オーバードローにより消失。

最終攻撃（フィニッシュ）
ディオバレルの最強兵器、いわゆる必殺技。
オーバードローにより消失。

第五話・コネクト＝プリキュア、その５

「……ったく、頭が痛い」

別に本当に頭痛がするわけじゃない。
昔からの精神的に暗いときの口癖なのだ。
モリヒトはカードと携帯電話を取り出す。

「バレルコネクト・コール『メガネ』」

『ちょっと、人の事をメガネで呼び出すのはやめてくれないかな？』

コール、それはリターン同様に妖精の国に直接繋がる数少ないカードの一つだ。
使用宣言の後に名前を呼び、顔を思い出せばどんな状態でも繋がる。
呼び出したのは妖精共存派の一人であり、現在も妖精の国で研究を続ける学者、通称メガネだ。

『それよりプリキュアのカードが人間界に送られていたけど？』
「ファンシーマが一匹送還されたはずだ、分かるだろ？」
『そっか、ようやく仲間の登場だね？』

メガネは安心したような声を出す。
彼もモリヒトが妖精を愛しているのを知っている。
プリキュアの誕生、それは始末することでしか救えなかった妖精を助けられる事でもある。
しかし、今回の話はその報告だけではない。

「王国会議はどうなった？」

『プリキュアの誕生と共にガルディオの契約解除が出ている』
「ガメット族とジャスティン族か？」

ガメット族は妖精の中でも珍しい金銭や利益に執着する種族であり、ジャスティン族はガルディオの復活以前から王国を守る守護妖精の種族だ。
どちらも王国会議で反対意見を出す代表格だ。

『ガルディオは妖精共存派やルール族の独占みたいなものだからね、いい気がしないんだろうよ？』
「そうか……ファンシーマは？」
『キミが凶暴化した同族を始末した事かい？それだったら受け入れてるようだよ』
「……」
『つらい役目を押し付けたって言ってるよ』
「そうか……プリキュアについてはどうなる？」
『ああ、アスハラとか言ったっけ？』

「……なん、だと？」

＝＝＝

そう、自分に言い聞かせたのだが……

「……というわけでファンシーマを保護するでコルよ」

本父のイッサクさん、あれはどうすればいいんです？
義父のサクヤは戸惑っていた。
ＳＦ（スコシフシギ）な義理の娘が、まさかファンタジーの住人を連れてくるとは思わなかった。

「それで、私たちはどうすればいいの？」

キョウコさん、置いてかないで。
……つーか順応早すぎるよ、みんな。
サクヤがツッコミをいれる暇もなく、話は前へ前へと進んでいく。

「妖精の国は人間の国と交流がないから、協力者も拠点もないコル」
「ああ、ようするに家に住みたい、という事ね？」

ああ、なんか家長の意見をすっ飛ばして話が進んでいる。
別に父親としての権力をかざすつもりはないのだが、ここまで無視されると気分が悪い。

「まかせなさい、事件が解決するまで我が家だと思ってくつろいでくれ」
「多分、止めても止まらないでしょうし、ミライをよろしく頼むわね」
「ありがとう、母さん、パパ！」

あれ、勢いに任せて重大な決断をしてしまった？
新米パパがそんな事に気付くのは就寝前のホットミルクを飲んでいる時だった。

＝＝＝

「ネルル、クルル、行っていいぞ」
「行くって、どこねる？」
「ぼくはここでいいくるよ？」

正直に言えば、あの少女に頼りたくない。
だが、このままの生活では妖精が参ってしまうかもしれない。
まさに八方ふさがりだ。
そんなことを考えながら、今夜も林の中で眠りにつく伝説の戦士だった。

＝＝＝

そう、長い間を戦い続けてきた。
様々な国に繋がるコネクティア王国だからこそ、様々な国の悪しき存在が現れるのだ。
守護者のプライド、自分があっさりと並んでいいものだろうか？

「でも、モリヒトは優しいコルよ？」

どこがだろうか？
『あのガキ』とダウナーな目で睨みそうだ。
優しさって何だっけ、と考えたくなる。
さらに悩みながらもミライは目を閉じた。

「でも、ミライと出会えてよかったコル」
「え、なによ恥ずかしい」
「ミライの力があれば凶暴化したファンシーマも救えるコル」
「あ……」

そうだ、プリキュアの力がなければ妖精を救うことはできない。
なら、自分は……

＝＝＝

体育会系らしく短く髪をそろえたスポーツ少年だ。
中学指定のトレーニングウェアの色は今年の2年生、来年の3年生にあたる色だ。
次の予選大会がラストチャンスなのだろう、走る姿は本番と同じ気力に溢れていた。
彼の同級生が見たら、こう答えるかもしれない。
熱意を超えている、執念だと。

（あいつにも約束したんだ！）

思い出すのは自分の新しい家族。
突然、我が家に迷い込んだ小動物である。
不思議と悩みを話し出せば、話しただけ気分が楽になるような気がする。
深夜の告白は早朝練習と並ぶ日課となっていた。

（もっと速く、もっと速く……!!）

その願いが大きなことになるとは知らずに。

＝＝＝

クルルはまだ眠っている。
大物なのか、先行き不安なのか……
林の中から出てファンシーマを探そうとする一人と一匹。
すると、巨大な何かが彼らの前を通り過ぎた。

「いだってええええんっ!!」
「……って速えっ!?」

ドドドドと地面を揺らして走り去るファンシーマ。
凶暴化するとファンシーじゃないのは知っているが、あれはムキムキマッチョなランニングマンだった。

「ボーっとしてる場合じゃないか、バレルコネクト・ライド!」

モリヒトは林の奥に隠したバイク、マシンバレラーを召喚する。
ファンシーマと戦う際は結界で無人世界をつくる必要がある。
しかし、ファンシーマを巻き込むには距離が大きすぎるのだ。
仮に結界に巻き込んだとしても、ちょっとした衝撃で結界が破壊されてしまう。
だからこそ、可能な限り距離を縮めなければならない。

「さて、安全運転ですっ飛ばすか」

第六話・コネクト＝プリキュア、その６

「……ったく、予想以上のスピードだ」

ファンシーマを追いながらモリヒトは愚痴をこぼした。

人間の国から迷い込んだバイクを妖精の国の技術で改造したのがマシンバレラーだ。

加速力や耐久性の強化はもちろん、人工妖精により自動操縦すら可能なのだ。

しかし、前を走るファンシーマとの距離は大して縮まっていない。

「いだってええええんっ!!」

「仕方ない、何発か撃っておくか？」

『コール・ネクスト』

「……」

『コール・ネクスト、コール・ネクスト、コール・ネクスト』

妖精産携帯電話に着メロはないのか、呼び出しメッセージが連続で再生される。

「……どうした？」

『あの、私も手伝います!!』

「……どうやって？」

『どこにいるか教えてください！』

「公園の横の大通りを追跡中、追い込める場所はないのか？」

モリヒトが出したヒントはあまりも脆弱。

もっとも、最近来たばかりの男に詳しいヒントを求められても困るのだが。

「……でかい焼肉の看板があるぞ？」

＝＝＝

ジャケットの中にいるネルルに声をかけながらマシンを加速させていく。
市街地では追うのが精一杯だが、直線となれば話は別。
一瞬でファンシーマを追い抜かし、森林公園の柵を飛び越えるようにマシンに命じる。
マシンに命じた自分は何をやるか、そんなのは決まっている。

「ガルディオ・バレルコネクト!!」
『Ｃａｒｄ　ｒｅｇｉｓｔｒａｔｉｏｎ・Ｆｏｒ　ｔｒａｎｓｆｏｒｍａｔｉｏｎ　ｌｉｍｉｔ　６０』
「守護の銃身、ディオ・バレル!!」

上空に跳躍するマシンの上で変身したディオバレルは銃を構える。
一発、二発、ネルバレラーの銃弾はファンシーマの足場を崩していく。
当然、猛スピードで走っていたファンシーマも勢いで直線に転んでいく。

「バレルコネクト・フィールド！」

公園の柵に触れるかどうかの瞬間に無人世界を作り上げる。
盛大に転んで樹木がなぎ倒されていくが、フィールドで作った世界ではなにが壊れても平気だ。

「いだってええええんっ!!」
「さて、これから、どう、動……く?」

ファンシーマはモリヒトのことなど忘れ、公園の外に出ようとする。
フィールドの外には出られないが、ミシリと嫌な音がする。

「すごいねる、体当たりでフィールドを壊すつもりねる！」
「感心している場合か、バレルコネクト・ループ！」

フィールドの壁にぶつかったファンシーマは消えて、公園の中心から現れる。
ループのカードでフィールドの外壁と公園の中心部を繋いだのだ。
ファンシーマはそれに気付かないのか突撃してはループに消えている。

「……ったく、バカで助かったよ」
「モリヒトさあああああん!!」
「やれやれ、追ってきたのか」

制服姿のミライが走ってやってくる。
いつものクセで飛び出したはいいが、決め手となるカードも浄化の手段もないのだ。

「さっそくで悪いが、変身して浄化するぞ」
「ヤだなあ、変身してますよ？」
「ヤだなあ、プリキュアってのは学生服でもいいのか？」

そう言われてミライは自分の姿を確かめる。
ワインレッドに紺のネクタイ、入学当初より少しだけ痛んだ感じはするが自分の制服だ。

「なんで!?変身して１０分もしてないのに」
「コルル、お前はなにをしてるんだ？」

＝＝＝

伝説の戦士は戦う際に二つのものを消費する。
変身の力とカードの力だ。
変身の力は変身している間に一定の減り方をし、カードの力はカードを使った時だけ減る。
だが、両方の力を同時に消費するカードがある。

「それが身体強化カードだが、コルル？」
「わ、忘れてましたコル……」
「あの、変身できなければ浄化は……」

ディオバレルは無言で睨む、出来るわけねーだろ、と。
時間が経てば力は回復するが、そうなる前にフィールドの効果が終わってしまう。
ディオバレルはミライに電池式の充電器を渡した。

「型は違うが規格は共通だろう。バイクに乗ってる間に充電しとけ」
「どうするんですか？」
「園内のロングブリッジを使う」

公園の湖にはロングブリッジがある。
ループの設定を変更してファンシーマをそこに移動させるのだ。

「敵は一直線に走ってくる。俺がバイクで突撃して止めるから変身して浄化しろ」
「あの、回復しました……その、1分だけ」
「上等だ、変身したと同時に浄化しろ」

ロングブリッジの中間にミライを置いて岸に向かうディオバレル。
ここから全力で走ればミライのいる場所の近くでファンシーマと激突するはず。

「チャンスは一度、行くぞ!!」
「はい、ＯＫです!!」
「バレルコネクト・ループ『再設定』」

橋の向こう側が光り輝くと同時にファンシーマがあらわれる。
そして、ファンシーマが走り出すと同時にディオバレルもバイクを走らせた。

「行けっ!!」
「プリキュア・ネクストコネクト……ネクストコネクト・フィニッシュ!!」

激突する直前にミライは変身した。
ポーズをとる余裕もない、キュアネクストは即座にフィニッシュのカードを読み込む。

「プリキュア・ネクストダイバー!!」

拮抗するディオバレルの横を抜けて突撃するキュアネクスト。
しかし、敵の防御力は予想以上に高く、すぐに浄化できないでいた。
力をこめ続けるキュアネクストだが時間だけが過ぎていく。

「通れ、通れ、通れ……通りなさいよ!!」
『Ｂａｔｔｅｒｙ　ｒｅｓｉｄｕａｌ　ｑｕａｎｔｉｔｙ　０』

そんな中、戦いの舞台であるロングブリッジにも異変が起きていた。
踏ん張っているバイクのタイヤがぐら付いているのだ。

「橋が!?」

「いだってええええんっ!!」

足場が崩れる中、空中に投げ出されるプリキュアとガルディオ。
キュアネクストの腕はファンシーマに伸びてはいるが、届いてはいなかった。

「使え、プリキュア!!」

キュアネクストの手の中に小さな箱が投げられた。
それは携帯電話のカバーを外せば見ることが出来る、バッテリーだった。
しかし、ディオバレルがそんなものを投げてよこすわけがない。
そう、投げた姿はディオバレルではなくモリヒトだった。

『Ｂａｔｔｅｒｙ ｅｘｃｈａｎｇｅ・Ｔｒａｎｓｆｏｒｍａｔｉｏｎ ｌｉｍｉｔ ２０』
「プリキュア・二回目ネクストダイバー!!」

再びフィニッシュのカードで加速するキュアネクスト。
しかし今度は出し惜しみはない、全バッテリーを消費するつもりでぶつかる。

「ネクスト・エンド!!」
「いだってええええんっ!!」

＝＝＝

変身を解除したモリヒトは何とか湖の岸に泳ぎ着いた。
フィニッシュの際に出来た翼を使ったのか、キュアネクストは全く濡れていない。
「平気だ……バレルコネクト・ループ」
ループのカードでバイクを引き上げる。
カードの性質上、大体の場所が分かっていればこんな使い方も出来るのだ。
「今回は助かった。だが浄化のカードが出来次第、お前はプリキュアから……」
「モリヒトさんは優しいんですね？」
「……」
「私みたいな子供を戦わせたくないから、冷たい態度をとってるんですよね？」
「……」
「でも、私は大丈夫です。人助けが趣味ですから!!」
満面の笑みを浮かべて胸を張るミライ。
最初のときの勢いとは違う、彼女は自分自身で戦うことを決めていた。
「勝手にしろ……」
濡れた服でバイクを押すモリヒト。
その選択が正しいのか、それは誰にも分からなかった。

コネクトプリキュア設定２

人物、用語設定

＝＝＝

名前の由来は一昨日

明日原今日子

ミライの母親で夫を亡くし、再婚している。

位牌の前で泣いていた姿がミライの強い正義感を過剰にした切っ掛けでもあった。

名前の由来は今日

明日原咲治

キョウコと再婚した青年。

知的で優しい好青年だが、自分が父親として上手く出来ているのか自信が持てないでいる。

名前の由来は昨夜

コルル

ルルール族の妖精でプリキュアの力を秘めている。

長男ということで、三匹の中ではしっかりしているが抜けた点も多い。

後にミライの妖精となる。

＝＝＝

＝保有カード＝

変身（キュアトランス）
キュアネクストへの変身。
掛け声は「プリキュア・ネクストコネクト」
カード使用時は「ネクストコネクト・〇〇」

呼出（コール）
妖精の国や情報端末との通話呼び出し。

結界（フィールド）
使用者が指定したものだけを残した無人世界の形成。
ただし、いくつかの例外は無人世界に進入可能。
その空間で物体が破壊されても現実世界の物体に影響しない。

好調（ハイテンション）
肉体を上向きに強化し、精神も強化する。
精神攻撃からの回復としても使えるがデメリットもある。
変身時間も短縮されるため変身時間の短いキュアネクストにとっては使いにくいカード。

加速（スピード）
肉体の速度に関する部分を強化する。
回復速度も、食事の時間も強化できる。

怪力（パワー）
肉体の力に関する部分を強化する。
加速と併用することで好調と同等の効果を得る。
しかし同時使用するより好調一枚のほうが消耗が少ない。

送還（リターン）
妖精の国にあったものを妖精の国に送還する。

本来は時間のかかる世界移動を限定的に一瞬で可能とする。

最終攻撃（フィニッシュ）
キュアネクストの必殺技。
決まった形はなく、その場の応用で発動可能。
基本はリボンの翼と盾で行う高速突撃、ネクストダイバー。

＝＝＝

シーならそうなるのかは永遠の謎。
目的不明で破壊活動もせずに走り続けていた謎多すぎるファンシーマ。
バイクより速度で劣るが柔軟な走りを活かして市街地を爆走した。
状況的な不利は多かったものの、本来はそこまで脅威ではなかったりする。